

平成20年 7月2日	<b>農作物病虫害発生予報</b> <b>7月</b>	山口県病虫害防除所 山口県農林総合技術センター
---------------	--------------------------------	----------------------------

<b>～目次～</b>	
I 予報の概要	1
II 予報	
【主要病虫害】	2
【その他の病虫害】	10
III 参考(予報の見方、気象予報、7月のテレホンサービスの内容)	11

## I 予報の概要

農作物名	病虫害名	予想発生量	現況	
			平年比	前年比
イネ	いもち病(葉いもち)	平年並	少	前年並
	紋枯病	平年並	—	—
	セジロウンカ	やや少	少	少
	トビイロウンカ	平年並	平年並	前年並
	コブノメイガ	平年並	平年並	前年並
	斑点米カメムシ類	<b>やや多</b>	やや多	前年並
カンキツ	かいよう病	やや少	やや少	前年並
	黒点病	やや少	やや少	少
	ミカンハダニ	少	少	少
	チャノキイロアザミウマ	平年並	平年並	少
	ミカンサビダニ	平年並	平年並	少
ナシ	黒斑病	平年並	やや多	前年並
果樹全般	カメムシ類	平年並	平年並	少

作物	担当者
普通作	藤村(病害) 中川(虫害)
果樹	村本(病害) 殿河内(虫害)
野菜	岡田(病害) 溝部(虫害)

お問い合わせ先	
TEL	(083) 927-4006
FAX	(083) 927-4071

## II 予報

### 【主要病害虫】

#### イ ネ

#### 1 いもち病（葉いもち）

##### (1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	少	前年並	発病初期

##### (2) 予報の根拠

ア 葉いもち発生予察システム（BLASTAM）によると、中山間地域の葉いもちの発生と相関が高い広瀬、徳佐、秋吉台、豊田のアメダスにおける6月6日～20日の好適条件出現回数は5回（平年1.9回）で多かった（+）。

イ 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は0%（平年2.5%）で平年に比べやや少なかった。また、初発生は認められなかった（平年初発生日：6月25日）（-）。

ウ 気象予報では、7月の気温は高く、降水量は少なく、日照時間は平年並みか多い（-）。

##### (3) 防除対策

###### <耕種的防除>

ア 補植用苗は発生源となるので、補植が終わり次第早急に処分する。

イ 窒素肥料の多用は避ける。

###### <防除判断>

発病を認めたら直ちに防除する。

#### 2 紋枯病

##### (1) 予報内容

予想発生量	防除時期
平年並	穂ばらみ中期（出穂14日前） 平年初発生日：7月8日

##### (2) 予報の根拠

ア 前年の発生量は平年並みであったため、伝染源である菌核の量は平年並みと考えられる（±）。

イ 気象予報では、7月の気温は高く、降水量は少ない（±）。

##### (3) 防除対策

###### <耕種的防除>

窒素肥料の多用は避ける。

<防除判断>

防除適期は穂ばらみ中期(出穂14日前頃)で、発病株率15～20%である。

<防除のポイント>

出穂期を過ぎた薬剤散布は効果が劣るので、適期防除を徹底する。

3 セジロウンカ

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	少	少	防除適期予測図参照 (6月21日(少)頃に飛来があったと考えられた。)

(2) 予報の根拠

- ア 初確認は、6月11日(平年5月30日)で平年に比べやや遅かった(ー)。
- イ 予察灯における誘殺数(4か所、5月11日～6月24日合計)は、3頭(平年168.2頭)で平年に比べやや少なかった(ー)。
- ウ 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は3.8%(平年38.7%)、10株当たり虫数は0.02頭(平年1.00頭)で平年に比べ少なかった(ー)。
- エ 近年、長期持続型箱施用剤の普及率が高い(ー)。
- オ 気象予報では、7月の気温は高く、降水量は少ない(+)

(3) 防除対策

<防除判断>

- ア 飛来がみられる7月中旬頃までは成虫で株当たり10頭以上である。なお、6月下旬の巡回調査地点では株当たり10頭以上のほ場は認められなかった。
- イ 穂ばらみ中期(出穂14日前頃)までは成虫、幼虫を含めて株当たり50頭以上の発生となれば薬剤防除を行う。

<防除のポイント>

- ア 今後、梅雨明けまで多飛来する可能性があるため、ほ場での発生や発生予察情報に注意する。
- イ 薬剤は株元によくかかるように散布する。

	6月	7月
飛来日	2 5	1 5 10 15 20 25
セジロウンカ △ 6月21日	AAAAAAAA-	-----oooo@@@ooooAAAAAAAA-----

調査月日 2008年 7月 1日  
 凡例 A: 成虫 -: 卵 o: 幼虫 @: 防除適期  
 ☆ 主要な飛来 ◎ 多飛来 ○ 並飛来 △ 少飛来

図 セジロウンカの防除適期予測図

#### 4 トビイロウンカ

##### (1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	—

##### (2) 予報の根拠

ア 6月9日に下関市の予察灯で初確認（平年6月21日）され、平年に比べやや早かった（+）。

イ 予察灯における誘殺数（4か所、5月11日～6月24日合計）は、2頭（平年0.4頭）で平年に比べやや多かった（+）。

ウ 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は0%（平年0.3%）、10株当たり虫数は0頭（平年0.001頭）で平年並みであった（±）。

エ 気象予報では、7月の気温は高く、降水量は少ない（+）。

##### (3) 防除対策

###### <防除判断>

ア 防除の目安は、6月下旬～7月中旬（飛来時）は10頭/100株、7月下旬～8月上旬（成幼虫）は20頭/100株以上である。

イ 7月下旬にはほ場の密度調査を実施する。なお、本年はヒメトビウンカの発生が多いためほ場を確認する際には見誤らないようにする。

ウ 7月18日頃に長期予報を発表するので参考にする。

###### <防除のポイント>

ア 今後、梅雨明けまで多飛来する可能性があるため、ほ場での発生や発生予察情報に注意する。

イ 薬剤は株元の基部によくかかるように散布する。

#### 5 コブノメイガ

##### (1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	—

##### (2) 予報の根拠

ア 6月25日に山陽小野田市西高泊の雑地すくい取りで初確認（平年6月24日）され、平年並みであった（±）。

イ 山口市のマレーズトラップでの誘殺数（6月1日～30日）は0頭（平年7.9頭）で、平年に比べやや少なかった（-）。

ウ 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は0%（平年0.7%）、被害株率は0%（平年0.03%）で平年並みであった（±）。

エ 気象予報では、7月の気温は高く、降水量は少ない（+）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

葉色の濃いイネに好んで飛来するため多肥を避ける。

<防除判断>

ア 成虫の払い出し調査で5頭/m<sup>2</sup>以上であれば粉剤は7日後に、粒剤は直ちに散布する。

イ 減収が問題となるのは、出穂期に上位2葉の被害葉率が15%（株率80%程度に相当）以上とされている。

<防除のポイント>

今後、梅雨明けまで多飛来する可能性があるため、ほ場での発生や発生予察情報に注意する。

6 斑点米カメムシ類

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	前年並	出穂後発生を確認したら防除を実施する。穂揃期と穂揃期7日後の2回防除を基本とする(粉剤)。

(2) 予報の根拠

ア 予察灯での誘殺数（4か所、5月5半旬～6月4半旬合計）は、アカスジカスミカメは90頭(平年28.6頭)で平年に比べ多く、クモヘリカメムシは0頭(平年0.4頭)、アカヒゲホソミドリカスミカメは2頭(平年6.5頭)で平年並みであった(+)。

イ 極早期栽培地域におけるイネ科雑草地の20回すくい取り調査ではアカスジカスミカメ等が確認され、平年に比べやや多かった(+)。

エ 気象予報では、7月の気温は高く、降水量は少ない(+)。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

出穂2週間前までに畦畔等の草刈りを実施し、それ以後は、エノコログサ、メヒシバ、ヒエ等のイネ科雑草の穂がでないよう管理する。

<防除のポイント>

ア 畦畔に出穂したイネ科雑草がある場合は畦畔も含めて防除を実施する。

イ 休耕地や雑草地周辺はカメムシ類による被害が多いので注意する。

ウ 地域で一斉防除を実施すると効果が高い。

エ 本年は、極早期等出穂期の早いほ場ではカメムシ類の被害が発生する可能性が高いので、ほ場周辺の草刈りと2回の防除を徹底する。

オ アカスジカスミカメの発生が多いほ場では、粒剤防除も有効である。防除時期は出穂期～穂揃期である。

## カンキツ

### 1 かいよう病

#### (1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	前年並	幼果期、新梢の伸長期、 台風の来襲前

#### (2) 予報の根拠

ア 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は13.6%（平年23.3%）、発病葉率は1.2%（平年2.4%）、発病果率は0.1%（平年0.4%）で、平年に比べやや少なかった（－）。

イ 気象予報では7月の降水量は少なく、日照時間は多い（－）。

#### (3) 防除対策

##### <防除判断>

○発生が見られる園で、6月下旬の防除を実施していない場合  
7月上旬に防除を実施する。

台風の来襲の恐れがある場合は、事前に防除する。

○発生が見られる園で、既に6月下旬の防除を実施している場合  
病斑の増加が認められる場合や台風の来襲の恐れがある場合は防除を実施する。

##### <防除のポイント>

ア 発病した枝や葉は伝染源となるので、できるだけ除去する。

イ 温州みかんなどかいよう病に比較的強い品種でも多発することがあるので、発生状況に注意し、発病が認められた場合には防除を行う。

ウ 防風樹や防風ネットを整備し、強風による傷から感染するのを防ぐ。

エ コサイドDFやZボルドーなどの無機銅水和剤を散布する場合は、葉害を軽減するため炭酸カルシウム水和剤（クレフノン）200倍を加用する。

オ ICボルドー66Dを高温期に使用すると葉害を生じやすいので、7月から9月の使用は避ける。また、マシン油乳剤との1か月以内の近接散布も避ける。

カ ミカンハモグリガ（エカキムシ）の被害は本病の発生を助長するので、防除を徹底する。とくに隔年交互結実園の遊休樹や幼木では注意する。

### 2 黒点病

#### (1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	少	6月上中旬の防除後、累積降水量が200～250mmに達したとき、または薬剤散布後1か月を経過したとき

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は95.2%（平年99.1%）、発病葉率は17.5%（平年42.9%）、発病果率は4.4%（平年7.7%）で平年に比べやや少なかった（－）。

イ 気象予報では7月の降水量は少なく、日照時間は多い（－）。

(3) 防除対策

<防除判断>

予防散布が基本であるので、(1)予報内容の「防除時期」により防除を実施する。

<防除のポイント>

樹冠内の枯れ枝や放置された剪定枝は本病の伝染源となるので、園外に持ち出して処分する。

3 ミカンハダニ

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
少	少	少	防除の目安を超えたとき 雌成虫の寄生葉率30～40%以上 または雌成虫1葉当たり0.5～1頭以上

(2) 予報の根拠

6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率40.9%（平年60.7%）、寄生葉率1.7%（平年8.3%）で平年に比べ少なかった（－）。

(3) 防除対策

<防除判断>

雌成虫の寄生葉率が30～40%以上、または密度が1葉当たり0.5～1頭である。

<防除のポイント>

ア 発生量はほ場によって大きく異なる。定期的にはほ場を見回り、発生状況を確認する。

イ 葉裏までムラなくかかるよう十分な薬量をていねいに散布する。

4 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	幼果期（7月上～中旬）

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率0%（平年2.3%）、被害果率0%（平年0.1%）で平年並みであった（±）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

- ア タイベックシート等の光反射シートマルチで成虫の飛来が抑制される。
- イ 寄生植物であるイヌマキ、サンゴジュの防風垣を防風ネットに変える。

<防除のポイント>

- ア 果梗部の被害を防止するためには、幼果期の防除を実施する。
- イ イヌマキ、サンゴジュが周囲に植えてあるほ場では、刈り込むときにカンキツ園にチャノキイロアザミウマが移動するため、この時期には薬剤防除を行う。

5 ミカンサビダニ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	<防除判断>参照

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率0%（平年0.9%）、被害果率0%（平年0.2%）で平年並みであった（±）。

(3) 防除対策

<防除判断>

常発園または昨年多発した園では直ちに、それ以外の園では梅雨明け直後に薬剤散布を行う。

<防除のポイント>

効果の高い薬剤（サンマイト水和剤、オサダンフロアブル、ダニカット乳剤、コテツフロアブル等）を使用する。薬剤抵抗性の発達を防止するため、同系統薬剤の連用は避ける。

ナ シ

1 黒斑病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	やや多	前年並	梅雨明けまでは5日～7日ごとに防除

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率80.0%（平年77.0%）、発病葉率3.6%（平年2.4%）、発病新梢率18.6%（平年19.7%）で平年に比べやや多かった（+）。
- イ 気象予報では7月の降水量は少なく、日照時間は多い（-）。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

- ア 落下した果実は病気の伝染源となるため、土中に埋める等の処分を徹底する。
- イ 7月は徒長枝での発病が多くなる時期なので、徒長枝の先端まで薬剤がかかるよう、ていねいに散布する。梅雨明けまでは7～10日間隔で防除を行う。
- ウ ポリオキシシン剤は県内全域で、ロブラール剤は一部の地域で耐性菌が発生している。薬剤の防除効果が低く、耐性菌の発生が疑われる場合には、他の薬剤を使用する。

果樹全般（モモ、ナシ、リンゴ）

1 カメムシ類（チャバネオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クキカメムシ）

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	園地への飛来を確認した時

現況は予察灯調査、フェロモントラップの誘殺数

(2) 予報の根拠

- ア 予察灯（県内6か所、5月6半旬～6月5半旬合計）における誘殺数は、253頭（平年165頭、主要種はツヤアオカメムシ）で平年に比べやや多かった。（+）。
- イ フェロモントラップ（県内4か所）によるチャバネオカメムシの6月の誘殺数は、188頭（平年1141頭）で平年に比べやや少なかった（-）。
- イ 増殖源となるスギ、ヒノキ毬果の量（県内6地点における毬果着生指数）は平年並み～少なかった（±～-）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

例年被害が発生する園では、ネット（網目4mm以下）で園全体を覆い侵入を防ぐ。

<防除判断>

被害を受けることの多い園では、園内の発生状況や周辺の灯火を観察し、飛来がある場合は防除する。

<防除のポイント>

カメムシ類に対する飛来時以外の薬剤散布は効果がないだけでなく、ハダニやカイガラムシの増殖を招く場合があるため、スケジュール散布はしない。

## 【その他の病害虫】

作物名	病害虫名	予想 発生量	現況		発生ほ場率		備考
			平年比	前年比	本年 (%)	平年 (%)	
イネ	ツマグロ ヨコバイ	平年並	平年並	多	12.5	13.0	防除適期：第2世代幼虫最盛期（7月上旬）
	イチモン ジセセリ	やや多	やや多	多	12.5	10.5	防除適期：予想若齢幼虫最盛期（7月下旬） 葉色が濃く軟弱な生育の場合被害が大きい。
	ニカメイ ガ	やや少	やや少 (予察灯)	前年並 (予察灯)	—	—	チョウ目害虫に効果のある長期持続型箱施用剤を利用している場合追加防除は必要ない。
カンキツ	そうか病	少	少	少	4.5	18.3	発病した葉や果実はできるだけ取り除く。
ナシ	黒星病	やや多	やや多	多	20.0	4.0	発病した葉や果実はできるだけ取り除く。

### Ⅲ 参考

#### 1 予報の見方

##### (1) 病害虫発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

###### ア 平年比

多	過去10年間で最も多かった年と同程度以上の発生
少	〃 で最も少なかった年と同程度以下の発生
やや多	〃 で2～3番目に多かった年と同程度の発生
やや少	〃 で2～3番目に少なかった年と同程度の発生
平年並	〃 で標準的にみられた発生（上記4項目を除くもの）

（注：過去の発生量との比較を表わすもので、被害や防除の必要性とは異なる）

###### イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	〃 前年の評価より少ない発生
前年並	〃 前年の評価と同等の発生（上記2項目を除くもの）

##### (2) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

#### 2 気象予報

##### (1) 概要

###### 1 か月気象予報（6月27日福岡管区气象台発表）

予 報	低 い (%) 少 ない	平年並 (%)	高 い (%) 多 い
気 温	20	30	50
降 水 量	40	30	30
日照時間	20	40	40

###### 週ごとの気温傾向

予 報	低 い (%)	平年並 (%)	高 い (%)
1 週 目	30	50	20
2 週 目	10	40	50
3～4 週 目	20	40	40

#### 3 7月のテレホンサービスの内容（予定）TEL(083)927-4649

時期	内 容
上旬	7月の発生予報、イネ葉いもちの発生状況と防除、イネ害虫の発生状況と防除、果樹カメムシの発生状況と防除
中旬	イネいもち病の防除、トビイロウンカの長期予報、イネ害虫の発生状況と防除、イチゴの病害虫防除
下旬	イネいもち病、紋枯病の防除、イネ害虫の発生状況と防除